

寄 生 虫 検 査

動 向

平成7年度の学校保健法の改正後、ぎょう虫卵検査の対象学年は県下一部地域を除き、小学校1～3年生までとして定着している。今年度は前年度に比べ受検学校数は11校増（0.8%）となり、受検者数も2,021名増（7.1%）となった。ぎょう虫卵陽性者の割合は年々減少し、前年度と同様に1%を下回り、0.36%となった。同様に寄生虫（ぎょう虫）ゼロの学校の割合も全体で70.1%となり、ぎょう虫卵検査の本来の目的を達成しつつある。当協会ではぎょう虫卵検査に限らず学校保健分野の検診、検査において従来の形を踏襲するだけではなく、学校現場の要望に答え、行政、医師会等と連携を保ち、社会の変化に対応できる検査態勢を今後も進めていく。

方 法

ぎょう虫検査

夜間、肛門周囲に出てきて産卵するぎょう虫は、通常の糞便塗抹検査では検出できない。当施設ではウスイ式セロハンテープによる二日連続採卵法で検査を行い、肛門周囲に産卵されたぎょう虫卵を検出している。この検査はセロテープを肛門周囲に押付けてぎょう虫卵を貼付けるような原理で、かつぎょう虫が毎日産卵するとは限らないので2日間連続して採卵するというものである。

検査を受けるにあたっては朝起きてすぐに、検査紙を肛門周囲にあてる。排便後では肛門周囲がふき取られるために検出率が極端に低下するので注意が必要である。

当協会では検出感度をあげるため1度顕微鏡検査を行ったものをもう一度再チェックして見落としを最小限にしている。

精度管理

一度検査したものを再検査し見落としを防ぐとともに、毎日の陽性率をチェックし一定の陽性率であることを確認している。

結 果

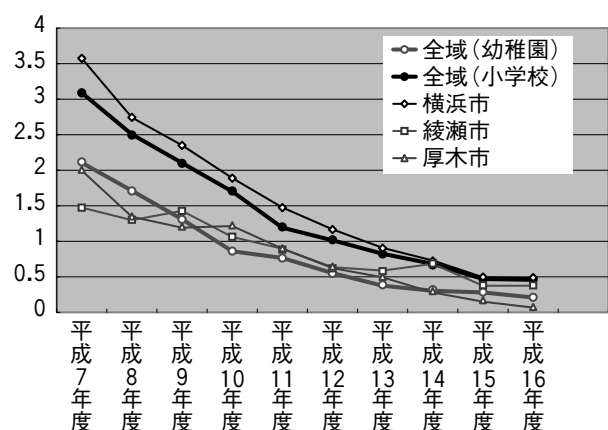
受験学校数、受験者数、保卵者率（陽性率）などを表1に示した。受験者数は平成14年度からの2年間で約5,500件、1.9%減少した。

一方、蟯虫陽性率の年次推移を図に示した。幼稚園児の陽性率を（○）で、当施設で実施している全小学生的陽性率を（●）で示した。また年1回法で

検査を実施してきた主要都市横浜（◇）、及び7年度まで年2回法を実施してきた綾瀬市（□）、厚木市（△）の陽性率年次推移（小学校）をそれぞれ示した。陽性率の推移をみると、平成7年度からのぎょう虫陽性率は顕著に減少してきた。小学生を見ると、横浜市では平成12年度の陽性率が1.14%、15年度は0.49%、この間の減少率は0.65%で毎年ほぼ0.2%の減少傾向が続いている。しかし16年度は0.47%で横ばいとなった。他方、早くから年2回法を実施してきた綾瀬市では12年度の0.59%から15年度は0.38%、4年間で0.21%の減少にとどまった。16年度は15年度と同じ0.38%である。同じく年2回法を実施していた厚木市も同じような傾向を示し、12年度0.62%から15年度は0.31%で0.31%減少した。更に16年度は0.06%まで減少している。小学生全体で見た時、平成7年度の陽性率3.1%から12年度の1.0%まで一気に減少したが、その後16年度にかけての減少傾向は緩慢になってきた。また、幼稚園の陽性率は7年度の2.1%から12年度0.53%まで減少、その後も徐々に減少し16年度は0.21%であった。

小学校ぎょう虫陽性率のここ数年の推移を見ると、横浜など大都市部と県域の地方都市部との差が無くなってきた。また厚木市を除いて15年度から16年度にかけての陽性率減少傾向はほとんど認められていない。このままぎょう虫症が終息に向かうのかどうか、今後のぎょう虫卵陽性率の動向が注目される。

図A りょう虫陽性率の推移



関係の集計表は145頁に掲載